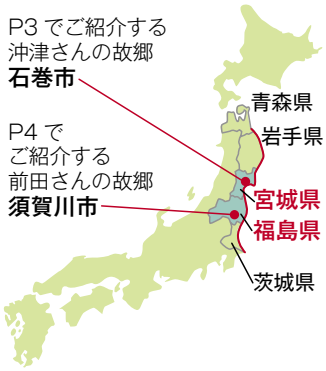
特集 東日本大震災から半年

忘れないで、あの日。

3月11日に発生した東日本大震災。マグニチュード9の揺れと大津波、それに続く放射能汚染という未曽有の大災害に、日本中が悲しみに沈みました。あれから約半年たった今、9月1日の防災の日を前に「あの日」を振り返ってみませんか。

死者	約1万5千人
行方不明者	約7千人
住宅被害	60万棟以上

※6月23日消防庁災害対策本部発表



想像を超えた大被害からの復興には長期にわたる支援が必要です

今こそ「心を届けよう」

東北の遅い春を襲った、マグニチュード9の大地震。大切な家族を失った方、家も財産も職場も流失して生活の基盤をなくした方、長い避難所暮らしを強いられている方、後ろ髪をひかれる思いで他県へ転居した方…、被災された方それぞれが大変なご苦労の中で、復興に向けて歩み始めていらっしゃいます。

地震発生から約半年が過ぎ、新聞やテレビでの報道は少しずつ減少しつつあります。しかし、被災者の皆さんの生活再建、被災地の復興は始まったばかりで、これからも物心両面の支援が求められます。

今回の特集では、宮城県と福島県で被災されて広島へ避難してこられた方と、現地で支援活動を行った生協ひろしま職員の声を紹介します。そこで、東日本大震災が残した傷跡の深さを振り返ります。そして、私たちに何ができるのか、考えてみませんか。

【津波に直面し、自宅は全壊】沖津 佳景（まさかげ）さん、伸子さん（宮城県石巻市から広島市南区へ避難）

何度も死を覚悟しましたが人の「絆」と「温かい心」に救われました。

怯えて過ごした津波の夜

広島に住む娘さん家族を頼り、石巻から避難してきた沖津さん夫妻。石巻は地震が多い土地ですが、今まであったことがない激しい揺れだったそうです。「家具があんなに倒れたのは初めてのこと。『早く避難したほうがいいね』と話し合いました。普段から準備してある非常持出袋を玄関先に出しました」と伸子さん。納屋から家に入ろうとした時、津波が迫ってくるのを発見！ 携帯電話や財布を探していた佳景さんに「津波！」と叫び、二人は階段をかけあがりました。自宅は海岸線から２００ｍほど。隣の家が流されるのを見て呆然とし、「うちも流されるかも」と伸子さんは思ったそうです。「窓ガラスが割れ、流木が家に入ってきました。魚があちこちでピョンピョン跳ねて、水面にカモメが浮いていました。何ともいえない光景でしたね」と佳景さんは振り返ります。

広島市社会福祉協議会と広島市被災者支援ボランティア本部が主催する「被災者交流会」にご夫婦で参加。同じ立場の人に会うとホッとします

その日の夜は水が引かず、2階のベッドの上で過ごしました。ベッドの足は水に浸かったまま、二度と開かなくなるのが怖くて窓も開けたままでした。あちこちの建物の2階や屋根の上で、避難した人がつけたライトが光っていたそうです。

震災後、口にしたひとつまみの砂糖

膝まで水に浸かりながら中学校へ避難したのは翌朝のこと。「避難所にはたくさん人がいて安心しました。自分の家がどうなっているか分からない中、先生たちが学校にとどまって世話をしてくれました。カーテンやピアノのカバーで暖をとりながら、避難してきた人同士で『ここで亡くなったらもう終わりだね』と話したものです。地震後、初めて口にしたのが12日の午後にもらった、ひとつまみの砂糖。あの甘さは格別でしたね」と伸子さん。次の日からコンビニのおにぎりや、シュークリームの皮、炊き出しのカニ汁など、いろいろな差し入れをみんなでわけあって食べたそうです。

13日になって、仙台に住む下の娘さんが探しに来てくれて互いの無事がやっと確認できました。15日に再びやってきた娘さんや同僚の方と一緒に、倒れた電信柱をよけ、がれきを越えて仙台へ移動。「ずっと歯も磨けず、手も洗えない環境にいたので、娘の同僚の方の家で風呂に入れてもらった時は生き返る思いでした」と伸子さん。二人は広島に嫁いだ上の娘さんの家へ3月20日に避難。5月になって、伸子さんが避難時に骨折していたことが分かりました。「痛みを感じる余裕がなかったんだと思います」と伸子さんは振り返ります。

これからも忘れないで

一昨年リフォームしたばかりの自宅は、もう住めません。「石巻へ帰りたいけれど、家を建てるには歳だし、7月下旬から仙台市内のマンションで生活を立て直します」と佳景さん。70代の夫婦の悠々自適な暮らしは、津波に流されました。それでも佳景さんは「地震直前に車で出かける予定でしたが、バッテリーが上がっていて家にいたおかげで、二人で一緒に避難できて、命も助かりました。奇跡です」と言います。伸子さんも「人と人の絆にも助けられました。広島の人が支援してくださっていること、そして被災地を気にかけてくれる人がたくさんいることを知って、本当にうれしかったです。これからも忘れないでいてほしい」と涙を浮かべながら話されました。

生後3カ月の息子と2人で避難してきた私を広島の皆さんが支えてくれました。

【原発の放射能被害から避難】前田 留美子さん、蒼空（そら）くん（福島県須賀川市から広島市南区へ避難）

急におとずれた激しい揺れ

地震が起きた時、留美子さんは生後3カ月になる蒼空くんにミルクを飲ませて、ほっとひと息ついたところでした。「2、3時間はゆっくりできるな、と思った時、ものすごい揺れが！一歩も動けませんでした。棚が倒れて、いろんなものが落ちてきました」と留美子さん。やっと揺れが落ち着いて、アパートから外へ出ると、アパートの土台は傾き、浮いていました。広い駐車場へ逃げ、ひとまず車の中に落ち着きました。

「あの日は雪がちらつく寒い日だったので、知らないおばあさんにも『どうぞ車内に入って』と声をかけました。夫とは地震発生直後に一度電話で話し、無事は確認したもののその後はしばらく連絡がとれなくなりました」。留美子さんは余震におびえながら、避難場所である「須賀川アリーナ」へ蒼空くんと一緒に向かいました。

見えない恐怖が強まり、広島へ

福島は地盤が強いから地震がこないと、地元では言われていたそうです。みな驚きと恐怖に震える日々。夫は仕事が忙しく、避難所から出勤していました。携帯電話でニュースをチェックしていたものの、原発からの放射能もれを知ったのは地震発生後3～4日目だったそうです。そんな時、避難所で同じ歳くらいの子を連れた人と知り合いに。「私は夫の実家がある広島へ避難するわ。広島は安全だからあなたも避難したら」と言われたそうです。避難所ではおむつやミルクが不足していて、寒く固い床の上に寝るのも限界でした。縁もゆかりもない広島に行くのは不安もありましたが、見えない放射能への恐怖が強くなり、避難を決心しました。

前田さんの救いは、蒼空くんの無邪気な笑顔

家族で踏み出した新たな一歩

広島では、行政の支援を受けて市営住宅へ。テレビや新聞の取材もたくさん受けました。取材に来た人から福島県人会の人を紹介してもらい、広島での生活が楽になりました。「それまで抱っこひもをしておむつを買いに行っていたので、車で一緒に買物に行ってもらったのは助かりました。また、『フラワーフェスティバル』や『とうかさん』にも一緒に行ってもらい、気分転換もできました」と留美子さん。被災者交流会での託児や家に来てくれるボランティアもあり、人のやさしさ、つながりの大切さを地震から学んだのだと言います。

「一度、広島で地震がありました。あの日のことがフラッシュバックして、また大きな地震が起こるのではと、すごく怖かった」と留美子さんは話します。またある日、蒼空くんが急に発熱。その時の心細い気持ち…。「夫は息子の将来を心配して『最低でも1年間は広島にいなさい』と言ってくれましたが、家族が離れ離れで暮らすのは、もう限界」と留美子さんは、福島への帰郷を決意しました。とはいえ、原子力発電所の安全確保が進まないことは気がかりです。須賀川市は原発から60キロ以上離れているものの、「ホットスポット」と呼ばれる放射線量が高い地域もあり、安心できません。そんな中でも、蒼空くんの無邪気な笑顔が救い。不安でいっぱいの中、前田さんファミリーは8月から故郷で新たな一歩を踏み出しました。

生協ひろしまの職員が見た 宮城県の被災地

生協ひろしまでは、震災直後から4月まで被災地へ職員を「支援部隊」として派遣しました。4月末から5月20日までは、共済担当の職員が「異常災害見舞金（CO･OP共済加入者に、地震や津波の時に支払う特別な見舞金）」をお支払いするための訪問活動を実施。その中から2人の職員の声を紹介します。

被災地の復興を願わずにはいられません

事業企画室 共済推進グループ　角舛 英明

支援期間 4月29日～5月5日

みやぎ生協に共済支援の第一陣として参加させていただき、コープ共済加入者への≪異常災害見舞金≫や、共済金の受付支援のための訪問活動を行いました。私が訪ねたのは、多賀城市八幡地区という海から直線距離で5kmほど内陸に入った地域。建物の2mほどの高さに津波が押し寄せた跡があり、一軒家もマンションも、1階が壊滅状態でした。それでも、どのご家庭を訪問しても『ありがとう』『助かりました』というたくさんの声をお聞きすることができました。今回の活動を通して人の温かさにふれ、逆に宮城の皆さんから大きな勇気をもらった気がします。

今回の震災では“幸せ”という言葉の意味を改めて考えさせられました。被災地では「命があっただけでも私は幸せです」とか「1階は津波で全て流されたけど、2階で生活できるから、家を全て流された方のことを考えると、私は幸せだと思っています」など、大変な経験をされ、いまだ元の生活に戻られていない中、皆さん口を揃えたように言われます。同じ日本という国に生まれ、住んでいる場所がちょっと違うだけで、広島の私たちは“幸せ”に生活をしています。

一日も早い被災地の復興を願わずにはいられません。

被災地の組合員さんのご自宅を訪問しました

復興への意気込みに学ばせていただきました

事業企画室　松井 基樹

支援期間 3月17日～22日

私は、支援部隊の第一陣として宮城県へ向かいました。現地での主な活動は、避難所や病院などへの物資の積み込みのほか、みやぎ生協の職員の車に同乗して組合員さんのもとを訪ねるお見舞い活動でした。広島に帰って「向こうの状況はどうだった？」というのが、一番返答に困る質問でした。気仙沼や石巻の街がすべてなくなった現実、そして多くの命が犠牲になった場所を目の当たりにしていると、普段使っている「ひどい状況でした」「大変な出来事です」といった言葉が陳腐に思え、使うことができません。言葉で表現できない現実がありました。

現地では多くの生協の仲間と活動したのですが、みやぎ生協の方から『全国の生協の仲間が来てくれて、感謝しています。来てくれたことが本当にうれしいです。ありがとうございます』との温かい言葉をかけていただきました。職員とはいえ、ご自身や家族、親戚、友人が被災している状況です。それでも、皆さん「自分にできることはないか」と探しながら動き、みんなが復興のために役に立ちたいという一つの目標に向かって活動していました。困難な状況にあって、前を向いていく意気込みに、学ばせていただきました。

全国各地の生協の仲間が集まりました

支援募金へのご協力ありがとうございます

全国の組合員さんの気持ちが集まる

募金総額 約14億円

生協ひろしまでは、地震発生翌日から募金の呼びかけを始め、5月末までに約7,700万円が寄せられました。全国の生協から日本生協連に集まった募金総額は約14億円にのぼり、これらの寄付は、被災都道府県や日本赤十字社を通じて、復興へ活用されています。

4月2日、日本赤十字社広島支部の中川事務局長に1,200万円を寄付

募金受付期間を延長しました

募金受付期間 12月4回まで

OCR注文用紙の記入の仕方

1口100円の場合

東日本大震災募金　2525　10

右記は1,000円の場合の記入例です

1口10,000円の場合

東日本大震災募金　2540　5

右記は5万円の場合の記入例です

OCR注文用紙の「4ケタ･6ケタ注文欄」に、商品番号“2525”または“2540”と口数をご記入ください。

復興支援企画を実施しています

内容

対象商品1点お買い上げで **1円** を支援金として積み立て

実施期間 12月4回まで

対象商品

「コパル」表紙・裏表紙の商品。右のマークが目印です。「キャロット」6月1回から12月4回までの全商品

東日本大震災 復興支援金